待望の県立普通高校新設決まる

実った市民ぐるみの運動、五十年四月開校

二十二万市民の悲願でもあった市内への県立普通高校設置が発表された。五十年四月開校四校のうちに入れられたもので、文字どおり市民ぐるみの運動の成果であり、教育現場はもちろん、市民の間に大きな喜びの渦が広がっている。

（よろこびの生徒たち・甲山中）

高校への進学率の上昇にともない、市内に普通高校新設を待望する声が高まって久しい。この間、県当局や県議会に対してくり返し陳情等の運動が続けられたが、特に本年六月には、岡崎・額田の十三万を超える未曽有の数の署名をもって県議会に請願し、市長を先頭に、市議会大学高校誘致特別委員会・高校新設推進協議会など、総力をあげて運動が推進された。その結果の新設実現であり、現時点で望みうる最も早期の開校である。

県当局・県議会はじめ関係各位の格別のご理解によるものであることはもちろんだが、同時に、子を思い、教育文化の発展を願う市民各位の温い愛情と、盛り上がる熱意の結集がこのような成果をもたらしたものといえよう。

高校入試を目の前にした中学生や子を持つ親の喜びはひとしおであろうが、わたしたち現場の教師もまた、輝かしい曙光を見出したことにより、これからの教育実践に新たな精進をと思うことである。

それにしても、署名運動の推進力として活躍されたＰＴＡの皆さんの涙ぐましいご努力、それによって結集された力の大きさに、あらためて深い感動をおぼえたことである。

昭和四十八年九月一日
編集・発行　岡崎市教育委員会

校歌と公害

清水孝之

夏の高校野球が静岡高校×広島商業の好ゲームで十五日間の幕を閉じた。高校野球が終わると真夏も過ぎた、という季節感が、何となくテレビ時代の日本人に共有されてきたのに、今年ばかりは様子が違う。空梅雨のあとの猛烈な蒸暑さが七月中旬から続いていて、カラッと晴れた夏の日が極めて少ない。太平洋高気圧が弱いためらしいが、暑苦しいのは名古屋だけではなく、手術後二夏目の私のみがこたえただけではないようだ。それに旱魃が続いていて各地で給水制限騒ぎである。

例年選手たちの汗は、画面にさわやかに写った。今年のそれはいかにも苦しげであった。雨で試合が流れたのは一日だけだが、雨中の白熱戦は、雨のせいで敗けた例もあり、誠に気の毒千万である。投げる・打つ・走るの連携プレーの中に運・不運もあるが、何よりも不抜の気力とエネルギーを推進力とする純粋な行為に、われわれは失われた若さへの憧憬をいだくものらしい。

＊　＊　＊　＊

スポーツ論議はさておき、甲子園で勝利校の校歌を斉唱するようになったのはいつからのことか詳らかでないが、現今野球部のある高校で校歌のないところはあるまい。かつて大府高校が出場して一勝した時、制定後間もない久松潜一先生作詞の校歌を聞いてうれしかった。

今年は豊田西高校が県予選で惜敗した。私は当時の校長に依頼されて同校の応援歌を二十七年頃に作詞したが、どうも作者不明になっているらしい。「城北十年」などを刊行した城北中学のように刻明な記録を公刊する学校は決して多くない。校歌の原譜も制定年月日も不明、最悪の場合には作詞者・作曲者共に不明などということも起りかねない。現に岡崎高校の名歌の作曲者は不明のようだ。確かに「校章・校旗・校歌」は三つの象徴であり、最後の校歌もまた大切に管理されなければならぬ。原作者による改訂あるいは廃棄・新制定もかまわぬが、基本的に著作権も尊重されるべきであろう

＊　＊　＊

苦難の末に優勝の栄冠に輝いた広島商業の校歌も、まず麗しき厳島の美をたたえる。いわば郷土的視野の山紫水明から発想して、校訓ともいうべき理念を盛りこんで生徒を激励するというのが、大方の校歌のパターンであろう。文字通り山紫水明であった厳島も、最近では松は松喰虫に食い荒らされ、海水はすっかり汚染されてしまったらしい。

「山美しく、水清く」などとは歌えないのだから、最近は校歌も随分作りにくくなった。スマートで速い新幹線は小学生に喜ばれそうだが、公害訴訟の起されそうな時代では、校歌の素材にはできそうもない。たとい象徴としての山川であるとしても、校歌に空々しい嘘は歌えないのである。

矢作川尽きせぬ水に
悠久の影をうつして
泡沫（うたた）は浮きては消えぬ

（城北中学校歌）

十年前も「清らかな」水とは言い切れなかったが、「泡沫」は公害列島を予測したわけではなかった。多摩川のように泡沫が風に飛ぶような惨たる光景を、絶対にわが郷土に再現させてはならない。

（県立芸大教授）

理科作品展

夏休みを中心とした理科の自由研究は大正末期から昭和の初期にかけて既に行なわれていた。

戦時中、梅園学校では理科の一人一研究を全児童の課題として行ない、学校で展覧会を開いていた。ずいぶんすぐれた作品もあり、優秀なのは名古屋の商工会議所で開かれていた「発明工夫展覧会」へ出品した。入賞したのも数多くあった。

岡崎市で現職教育として夏休み作品展を行なうようになったのは昭和二十五年からである。はじめは社会科も図工科も一所で、標本や模型などの作品が多く集められた。

理科部が単独で理科作品展を開いたのは昭和三十年からで、理科工作物や昆虫、植物、岩石などの標本が多かったが、継続観察の記録や物理、化学の実験的研究も加えられてきた。特に水質検査の研究が中学校を中心にして多くなされ、甲山中学の乙川水系の水質検査などは工場排水のことも考慮に入れた調査で、今の時点からみても貴重なものであった。

浮世絵名品展

市美術館の開館一週年記念としての、二階堂コレクションの浮世絵名品展を見た多くの市民には、本物に接した深い感動があった。

栗田　敦子

いちばん見てよかったのは、図工の教科書にも出ていた、かつしかほくさいという人の「かな川おきなみうら」というしささえした。

（甲山中）

一父兄

私どもの身のまわりにも、マッチや広告など、浮世絵はみられます。広重も北斉も歌麿も、聞き慣れた人たちです。

でも、この度の名品展で、それらの人たちの本物の絵にふれた感動は、なんといいあらわしていいかわかりません。

歌麿の美人画に接して、はじめて〝艶〟ということばを知らされた思いです。五十三次にでてくる人たちのくったくのない表情は、今の私をとりまく人達からは想像もつかない感じがします。

――大岡越前守展――

大岡越前守展と郷土古墳出土品展は、人々に深い感銘を与えて無事幕を閉じた。そこで、見学者の声をまとめてみた。

●大平絵図や日記に足を止めた先生

狭い城内を有効に利用した展示の仕方や壁面の解説、しかも貴重な展示品が多いのには驚いた。二十冊の「大岡日記」が、一三八冊の一部と知って、「さすがは大岡越前守」という声声。岡崎と大岡家の関係をクローズアップする解説がぜひ欲しい。

●虚像と実像に迷った親

講談本やテレビで知った大岡政談のほとんどが創作とはね。大平村の複雑な領地支配図を見て、これで問題が起きなかったのならやっぱり名奉行だよ。小中学校の児童・生徒には、少しむずかしいのではないだろうか。

●捕具に群がった子どもたち

十手や捕縄を見て、「かっこいい」の連発。捕物の所作をする子もいた。四階では、土器の使い方に頭をひねり合うグループ。解説があったらいいのに。

その頃から県では読売学生科学賞の作品を募集しており、岡崎からも多くの研究物が出品された。甲山中学の「矢作川の総合研究」は最優秀の県知事賞を獲得したすばらしいものであった。

昭和三十八年に期日新聞が理科の夏休み作品展を助成するということで、学生科学賞のように、最優秀、優秀、努力賞などを設けて、児童、生徒の研究を奨励した。この頃になると単なる植物や昆虫の標本ではなく、昆虫標本などは数年かかって、しかも全国的に集めたというすばらしいものもあった。

その後、期日新聞の助成もなくなり賞に段階をつけるのはよくないという意見が多かったので、各学校、各学年一点の原則で夏休みだけでなく、日頃の理科研究の成果があらわれるようにした。審査も理科主任全員で当るようにした。それでも父兄がどれだけ手伝っているかということがいつも問題になった。

なお理科作品展だけでなく、すぐれた研究を集めた「理科の研究」を毎年刊行している。

本年は更に一歩前進した「岡崎の自然を見つめる」という展覧会を計画している。自然環境の保全という分野にも理科部は積極的に力を入れ、岡崎の自然環境調査、着生ゴケの研究も、児童、生徒の理科の自由研究の作品と共に展示して、岡崎の全市民に自然に対する関心を深めるよう呼びかけようと計画している。

（矢作中学校長　板倉四郎）

秘境

―公達の末裔と「とうふ」―

城殿輝雄

夏の暑い日が暮れようとする頃、土讃線阿波池田駅を三時過ぎに出たバスは私を乗せて、祖谷渓最奥の部落「名頃」に着いた。平地がないため、耕地といえば見上げるほど高い山の斜面にある。おそらく、あわ、ひえ、そば、みつまた等が栽培されていることだろう。

このような渓谷を切り開いて道は細々と続いていた。

バスの運転手と共に、部落でただ一軒のなんでも屋の二階の宿にはいる。宿の女中さんはこの家の奥さんで、料理人も兼ねている。

名頃は二十戸余りの部落で、これより奥は剣山国有林の飯場が点々とあるのみであり、そこに働く人たちの物資の補給所の役目をしている。

翌朝、下を流れる川を見ていると、近くの主婦らしい人が、なべのようなものをかかえて行き、川の縁にある白いものを入れてはもどってくるではないか。女中さんに聞くと、この部落では共同で、「とうふ」を作り、川に小石でかこって冷たい水を導いておく。夏でも一週間ぐらいはもつという。これを各家庭で必要なだけ持ってきて、月末に清算する。数のまちがいなど全くなく、もう何十年もことによったら何百年も続いているとのことである。

平家の公達の末裔というプライドと、連帯意識に支えられた山奥の人々の素朴な心に触れた思いがした。

（六ツ美中部小）

滝見茶屋

宇野房生

老杉の冷気を着て、すっかりからだを冷した私は、絶壁の笹道を登り、滝見茶屋へ戻る。ここは、馬篭峠から妻篭へ下る途中の古い茶屋だ。むかし宮本武蔵がこの滝で修業したと案内が示す。この床机は、お通が腰かけたかも知れない。

床机の後ろに水の音がする。山からひいた寛だ。四時間走行、百二十キロメートル。オートバイで汚れた手と顔を洗う。

滝壺の暗がりで、ほととぎすが鳴く。

ふとみると、米人の若い母親が、青い目の坊やを膝にのせ、氷菓をたべている。

「ママ……ママ……。」

坊やが手を振って、氷菓を**ねだる**。彼女は、一口なめさせては、自分がなめ、「あっハハハ……。」と大らかに笑う。私はこれを描く。みやげ物は、民芸品、ぞうり、ばん傘、道中手形、木鈴など、天井からぶらさがるものが多い。ジーパンの娘たちは、買物に夢中だ。妻篭街道は、娘たちで埋まる。私は矢立に墨汁を加えて茶屋の内部を描く。ふと背後に人のけはいをきく……。

「オジサン、トテモ、えがオイシイデスネ。これわたしとトム、テスネ…。アッハハハ……。」私も笑った。娘たちも笑った。「アッハハハ……。」

「バァイー。サヨナラー。」車は馬篭峠へ登っていった。消えた杉林から、蜩のこえがふかれてきた。

これから私は、妻篭へ下る。

（岩津小）

晩夏の洛西

加藤燕雨

桂離宮の拝観が許され、句友同行三人で晩夏の京へ向ったのは、七月二十三日であった。

午後二時桂離宮に集合ということであったので、それまで、洛西の苔寺（西芳寺）、竹の寺（地蔵院）、鈴虫寺（華厳寺）を尋ね、時間を費した。

苔寺は三度目であったが、同行の二人は初めてであった。竹の寺は、私も初め

パルデン公園の印象

（野外音楽を楽しむフランクフルトの人々）

加藤　後藤　和彦　明

暑く、湿度の高い日本をはなれ、今、スイスのチューリッヒにおります。四日にパリ、五月はフランクフルトと、ヨーロッパの旅を快適に続けております。この間特に印象に残ったことを申しますとそれは、ゆとりある生活というひとことにつきるようです。

パリにおいては、市民はバカンスで、そのほとんどが郊外へ出かけ、市内は観光客であふれていることや、市内に数多くある広場では、老人たちが一日中くつろいでいる姿にそれを感じました。一方ドイツも同様ですが、パリと違い町中が緑でうめられており、森の中に家々がひっそりと建っているという感じです。特に感心させられたのは、パルデン公園内の野外音楽堂の演奏会で、一時間も前から老人夫婦がかたをよせ合い、楽しそうに語り合いながら聞きにきていることでした。勿論、演奏は無料で、三十名程度の編成でモーツアルト等を演奏しておりました。紙くずひとつない公園の雰囲気は、文化の伝統の重みをずっしりと感じさせてくれました。明日からのコースを楽しみに筆をおきます。

チューリッヒ、ノヴァパークホテルにて。—一九七三・八・七—

（加藤　竜海中・後藤　葵中）

空白の旅を求めて

小久保　敏子

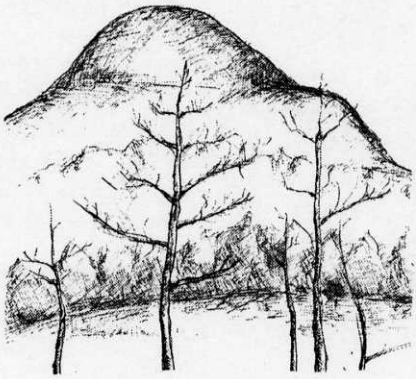
私は旅に出ても目的とか収穫を求めようとは思わない。初めも終りもきめたくない。知らない土地でひとりの旅人になりたい。

知人なんかひとりもいない。身も心も変身した気分で得意になる。わずらわしい生活からぬけ出した一空間の中で、牧歌的な気分に満たされる。いつもなら何とも感じない草花が、何とも思わないできごとが、妙にうら悲しく見えたり、人の親切が一層心にしみてくる。時に人間がすばらしく美しくみえることもあり、いやになるほど醜くみえることもある。

だれもいない夕暮の霧ケ峰を歩く。山を登りつめてふっと一息ついたとき、可憐なりんどうが風にゆれている。おおやまふろうの淡いピンクの花がいっぱい咲いている。山の風が少し肌寒い。どんどん歩いていくと冷たさがなんとも快い。足をとめてあたりを見まわすと空は紫にうすれ、オレンジ色の日光きすげが幻想を誘う。夕闇、風、孤独、その時白い霧が山の斜面を通りすぎる。私は気が狂いそうにうれしくて大声をあげる。気がつくと霧の中の廃墟の前に立っている。風の音にハッと我にかえりあたりを見まわした時の心細さ。

予想しないできごとを予想し、意味を求めない空白を求めて私は旅に出る。

（東海中）



てである。名の如く竹林の寺の静寂さは私の心を捉えた。苔寺に人が集まり、竹の寺はひっそりして対照的である。総門をくぐると、竹林が冷やかに歩みをさそう。開基細川頼之は三河出身とか。墓は細川石と呼ばれる自然の塔石であった。方丈の南縁から、十六羅漢の庭と呼ばれる庭園に向うと、禅林の問答に対する想いが湧いてくる。

〝風鈴の点韻　禅は一語にて〟

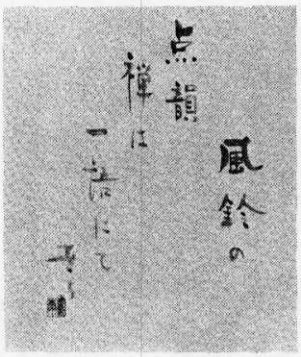
河鹿が鳴くといわれる西芳寺川を渡り鈴虫寺を尋ねる。珍しい鈴虫の飼育に興味はあったが、寺門の風格には落胆。

桂川に接した森の道を通って桂離宮の門前に時を待つ。蝉時雨の中を捕虫網を翳した小学生が二人、言葉を戒めつつ樹上をうかがっている。

正二時、案内人の説明で拝観が始まる。その中に、七、八人の外人がいて、案内人のユーモアに声を出して笑うのが印象的である。

日本の建築・庭園の集大成といわれるその完成した美しさは、一日旅の圧巻であった。

（矢作南小）



〈サークル活動〉

あせらずたよらず 国語サークル

菅生川のほとり、満性寺の一室で、柳田国男の「遠野物語」を読み合い、岡崎の昔話を語り合うのが、我々の楽しみの一つになつた。毎回、読書発表を行ない、若き国語人の文学論も活発である。大江健三郎だの、小川未明だの、万葉集だのと取り上げられるものは様々であるが、そこで人生を語り、教育を語る中で、我々の情熱はさらに高まっているのだ。

また、一学期には、長円寺、真福寺、西光寺など古刹を訪ね、住職に話を伺いながら、郷土の知られざる一面に接する機会を得た。楽しさも格別であった。今後は、県外にまで足をのばし、文学遺跡の探訪を試みたいと思っている。

八月には、桑谷山荘ゼミナールを開き郷土の昔話の集大成を目ざし、文献をもとに一話一葉のカード化の仕事が始まった。そしてまた、杉本舜市先生を囲んで、折口信夫の話とか、郷土三河にまつわる民俗学の話など数々の貴重な話を伺うことができた。その中で、一語一句おろそかにせず、日本語を大切にしなければならないことも教えられたりした。

作文教育は、本年の研究テーマの一つでもあり、今年第一回の研究会を、「書く前の指導をどうするか」のテーマのもとに東海中学で持つことができた。さらに、夏休みに入って夏期国語研修会として、六名小で、一枚文集の実技講習を開き好評であった。作文、このよきもの、これを支える文集活動が、広く岡崎の地に着実に育つことを願うのである。二学期にも二回めの研究会を開く予定である。

さらに、三学期には読書指導をテーマにした研究会の開催を予定している。

私たちの集いは、伝統ある岡崎の国語教育を継承し、さらに発展させなければならないとの意欲に燃えた者の集まりである。

（大樹寺小　柴田幸夫）

全国大会をめざして 岡技研サークル

岡崎技術教育研究サークルは、発足以来十年を経過している。わたしたち三十名の会員は、教育的科学的見地に立って近代技術や、めまぐるしく進展する社会状況に適応できる力を身につけ、それをもとに、技術教育の向上と発展をめざして、活動を進めている。

毎月一回の定例会（第三金曜日午後七時半より）には、お互いに研究したことを持ち寄って検討し合っている。読書や研修に熱が入り、時には十二時をまわることもあった。他に日を改めて実技講習会や見学、視察、レクリェーションなども実施している。なお、毎月会報を発行し、情報の交換や資料の紹介、連絡などに役立てている。

来年の全日本中学校技術家庭科研究大会は愛知県で開催され、岡崎市内でも一会場が設定されることになっている。当サークルも市現職教育技術・家庭科部会と一体となって、「機器利用による指導過程の研究」を柱に研究活動を進めている。

昨年はＯＨＰの研究をまとめた集録第一集「自作ＴＰと実践例」基礎編を発行し、それをもとに各学校で授業実践を進め、検討が加えられている。

また、本年度は県よりサークル活動助成金を受けることができ、研究資材入手その他が容易となって、一層研究を深めることができ、一同感謝している。

さて、今まで研究してきた主なものは

昭三九　自作教具の製作と授業実践

四〇　自作教具と指導法のくふう

四一　工具と機械の使用法と保守管理

四三　溶接講習、測定器具の使用法

四三　ＯＨＰの使用法とＴＰの自作

四四　新指導要領の研究

四五　アマチュア無線研究と免許取得

四六　指導案（フローチャートの研究）

四七　研究集録第一集の発行

四八　機器利用による指導過程の研究

などである。私たちは今後も地道な研究活動を積み重ねていこうとはりきっている。

（香山中　深津吉堯）

図書紹介

▼ことばの習俗　外山滋比古著
―新しいコミュニケイション――
三省堂　二五〇円
スタイル的伝達からレトリック的伝達へと主張する著者がつかむ言語の働き。

▼日本のこころ　―その代表人物
毎日新聞社編　六〇〇円
日本のこころを代表する古今の二十八人の人間像を浮彫りにし卓抜した人物論。

▼飛鳥王朝と古代豪族　渡辺英三郎著
新人物往来社　八八〇円
大和朝廷の実力者間の対立、抗争と天皇政治の発展過程にメスを入れた歴史書。

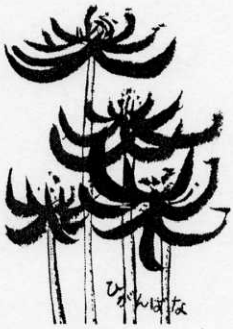
▼一銭五厘の旗　花森　安治著
暮しの手帖社　一二〇〇円
「一銭五厘の旗」は、ぼろ布をつぎはぎした庶民の旗。それを全編で振る著者。

▼「無限」の話　小野　勝次著
講談社　三二〇円
身近なたとえを使って、現代数学の重要な概念「無限」を平易に説く啓蒙書。

▼大地の微生物　服部　勉著
岩波書店　一八〇円
自然環境の維持と地球上の生命にとって大地の微生物の重要な役割を知る好著。

▼芸術と技術　ルイス・マンフォード著
岩波新書　一八〇円
機械文明の種々な面をえぐりとり、その補正ときょう正策を鋭く追究。

（現職教育図書館部）



【刊行あんない】

○短編集〈スーブニール〉　松山春雄著

「作家」同人の元校長作家。幼少年期の心理の動きを手堅いタッチで描いてさわやか。既刊に「小さな町」等がある。本名中根一、B6一〇四P三〇〇円

住みよい町づくりに生徒も発言

活発だった中学校子ども議会

六月、市民運動の先頭に立って河川美化を訴えた中学校生徒会が、今度は夏休みの一日、子ども議会を開いて内田市長にさまざまな問題をたずねて大いに市政への関心を高めた。

八月十七日、会場は市議会議場。議長団、議員、書記はもちろん、記者席、傍聴席もすべて参加した十四中学校の生徒会役員で陣どって、ヒナ壇の内田市長、鈴村教育長ら市側の部課長に対して、生徒らしい率直な態度で身近かな問題を次々に質問した。

質問に対しては、都市美化や水資源確保の問題からクラブ更衣室のことに至るまで一つ一つ内田市長が懇切、熱心に回答、説明、抱負を述べて、文字どおり〝対話〟の場となった。

終始なごやかな中に活発な質議が展開され、時間のたつのを忘れたことだが、市政への関心を高めるよい機会でもあり、来年もぜひとの声が上がっている。

■市教育論文の募集

四十八年度の教育研究論文を次のように募集します。ふるってご応募ください。

①応募資格　市内幼小中学校（園）教員及びそのグループ
②内容　実践をふまえた研究
③部門　個人研究、共同研究
④規格　四〇〇字づめ原稿用紙二十五枚以内
⑤提出期限　十二月一日
⑥審査　教育大及び附属小中学校に委嘱予定
⑦表彰　教委賞、努力賞

昭和48年度夏季休業中の各種競技会記録

●市長杯中学校総合体育大会

		優勝	第2位	第3位
野球		城北	南	矢作
ソフトボール		甲山	岩津	城北
ハンドボール	男	六ツ美	美川	葵
	女	六ツ美	葵	
テニス	男	東海	常磐	矢作
	女	香山	矢作	福岡
卓球	男	南	葵	岩津
	女	東海	香山	六ツ美
バレーボール	男	甲山	竜海	矢作
	女	城北	葵	矢作
バスケットボール	男	美川	城北	矢作
	女	美川	六ツ美	矢作
柔道	団体	竜海	美川	
	個人	松永光夫（美川）		
剣道		福岡	南	常磐
体操	男	葵	東海	竜海
	女	南	葵	甲山
	個人総	男・小林裕幸(葵)女・磯村淳子(南)		
陸上	男	葵	矢作	甲山
	女	葵	甲山	矢作
水泳	男	南	葵	城北
	女	城北	葵	南

●小学校ソフトボール大会

	優勝	第2位	第3位	
男	大樹寺	男川	梅園	広幡
女	広幡	根石	男川	生平

●小学校水泳大会

	優勝	第2位	第3位
男	井田	羽根	根石
女	根石	羽根	井田
総合	根石	羽根	井田

●小・中学校水泳個人記録

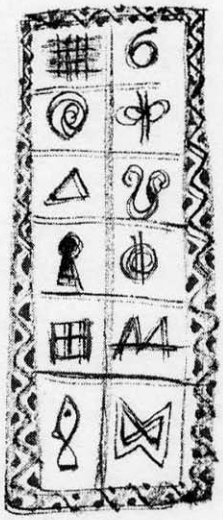
	種目	男子 氏名	校名	記録	女子 氏名	校名	記録
中学校8／16（葵中プール）	100 自	堀井 清一	南	1′05″4	鈴木 敦子	葵	1′11″9
	200 自	〃	〃	2′27″5	〃	〃	2′46″3
	400 自	宮本 光章	〃	5′36″6	宮田よし美	城北	6′12″5(新)
	100 バタ	鈴木 誠一	〃	1′11″4(新)	内藤 利美	南	1′31″2(新)
	200 バタ	〃	〃	2′48″3(新)	磯部 公美	葵	3′22″3(新)
	100 平	清水 成治	〃	1′22″4	中村真由美	城北	1′35″4
	200 平	清水 成治	〃	2′58″7	深津千咲子	〃	3′27″3
	個人200M	羽佐田真吾	〃	3′00″1	栗田 道子	〃	3′16″3
	男 800R 女 400R	南中	〃	10′20″1(新)	葵中	葵	5′10″4
	400 MR	〃	〃	4′49″8(新)	葵中	〃	6′01″4
	100 背	安藤 幹和	〃	1′11″5(新)	井上 淳子	矢作	1′38″2(新)
	200 背	〃	〃	2′39″0(新)	江坂 知子	城北	3′09″7(新)
小学校8／8（羽根小プール）	200 MR	羽根小	羽根	2′28″8(新)	羽根小	羽根	2′43″8(新)
	4年50自	近藤 聖一	根石	35″9(新)	伊予田祐賀子	井田	41″6
	5年50自	赤堀 正司	羽根	36″7	宮石 春江	根石	37″7
	50 自	曾祢 洋一	三島	35″5	杉浦 寿子	〃	33″1(新)
	100 自	近藤 広樹	羽根	1′23″1	藤城 信子	羽根	1′12″8(新)
	100 平	小池 隆治	根石	1′32″5	浅井香津子	〃	1′37″1
	5年50背	加藤 清	三島	43″1(新)	高橋 道恵	根石	44″7
	50 背	永田 将晃	羽根	38″0(新)	米谷美技子	井田	41″1(新)
	50 バタ	横田 衛	〃	39″3	山本 千代	羽根	42″4
	5年50平	大川 博	井田	43″8(新)	三浦恵美子	美合	44″8(新)
	50 平	塚田 剛	羽根	42″0(新)	加藤 芳子	根石	43″0(新)
	4年100R	根石小	根石	1′10″2(新)	根石小	〃	1′20″3
	200 R	三島小	三島	2′24″1	〃	〃	2′24″4(新)

※Mはメドレー、Rはリレー、(新)は大会新記録を示す。陸上の記録は次号以降掲載。

9月の行事

日	曜	行事
1	土	第2学期始業式
2	㊐	岡崎市民軟式庭球納涼選手権大会(公園)　愛知県青年体育大会/陸上(県営グランド)　岡崎市民ラグビーフットボール大会
3	月	短縮授業(7日まで)市PTA連協理事会(婦人会館)
4	火	6人制バレーボール講習会（城北中）
5	水	母と女教師の会（羽根小）
6	木	
7	金	教育実習（主免）打合会（附属小）
8	土	
9	㊐	市民総合卓球大会（市民体育館）　婦連協運動会(公園) オール三河陸上競技大会（安城）
10	月	
11	火	
12	水	定例教育委員会
13	木	校長会（市役所）
14	金	
15	土	（敬老の日）
16	㊐	岡崎秋季OB・B級軟式庭球大会(公園)　西三河居合道選手権大会(市民体育館)　市民軟式野球選手権大会(公園)
17	月	
18	火	学校事務の手引改訂委員会（市役所）
19	水	教科書(前転用、後期用)無償給与事務処理会(市役所)
20	木	
21	金	教育研究集会（城北中） 秋の交通安全県民運動（30日まで）
22	土	
23	㊐	岡崎市民軟式庭球大会(公園)　県民体育大会西三河地区大会/サッカー(県営グランド)　岡崎市民陸上競技選手権大会(県営グランド)
24	月	
25	火	教頭研修会（南中）
26	水	都市美化ポスター習字応募期限
27	木	市教育委員学校訪問（竜谷小・竜海中）
28	金	梅園小学校研究発表会
29	土	教育文化賞応募期限 岡崎の歴史物語編集委員会（羽根小）
30	㊐	西三河総合バレーボール選手権大会(公園) 県民体育大会/サッカー(県営グランド)

六階の窓



○中学校子ども議会でみせた生徒らの自信に満ちた積極的な姿勢の頼もしかったこと。「雰囲気にのまれてしまうのでは…」そんな先生方の心配をよそに、実にみごとであった生徒たち。過保護、軟弱をいといながら、なお信頼しきれないでいる教師自身の〝弱さ〟こそふっきらねばと思う。

○酷暑。その中でいくつもの研修会、実技講習が開かれた。新任教師・女教師の参加が目立ったことだが、同じ頃、海外研修に旅立った人が十四名もあった。専門職としての腕まえの確かさと国際的な広い視野、それが岡崎の教育を前進させることであろう。子どもたちに負けてはいられない。

○渇水で実施が危ぶまれた小中学校水泳大会も何とか予定の日に開催できた。途中、プールの使えない日も多かったのだが、結果は例年にも増して新記録続出。原因は何か。いろいろあろうが、いずれにしても練習のできなかった日の過し方に秘密がありそう。教訓がここにもあった。

編集後記

●…酷暑、渇水の夏も過ぎ、残暑なお厳しい中に二学期は始まった。

●…県立普通高校・五十年度に岡崎に新設、なんとすがすがしいニュースであろうか。

教育の正常化が叫ばれて久しい。この期に正常化の話し合いを深めてみたい。

●…学校教育は、いま何か大切なものを忘れてはいないだろうか。

教育随想「校歌と公害」を味読していただきたい。

●…「旅」このことばの響きのなかに、人それぞれの感慨があろう。その人の人生がにじみ出た「旅」を特集してみた。

●…自主的な研究活動が地道に行われている。なかでもサークル活動が活発である。今月からその活動情況を紹介していく。

●…カットは、岩津中学校杉浦正明先生にお願いした。